

小型カレイ類を保護するための漁具改良

石原幸雄（鳥取県水産試験場）

【目的】

- 鳥取県の重要漁業である沖合底びき網漁業（かけまわし）は、総漁獲量の約3割をカレイ類が占めている。しかしながら、商品とならない小型のカレイ類（特に体長15cm以下のヒレグロ）は現状の漁具では相当量入網してしまい海上投棄されている。
- 低水準であるカレイ類の資源を回復させるため、カレイ類の小型魚が入網しても抜ける構造を持つ網への漁具改良試験を行っている。（平成16～19年度）

【方法】

- 平成18年6月及び8月に、実際の操業同様に沖合底びき網漁船（かけまわし）を用船し、鳥取市沖、水深200m前後、約1.5ノット、約1時間の曳網試験を行った。
- 試験漁具は用船漁船の所有するカレイ網を一部改造して用いた。また、逃避したカレイ類等を取取できるよう逃避口後方にカバーネットを取り付けた。
- また、小型メモリー深度計を用い網口及び逃避口の高さを計測した。

【結果】

- 漁業者が導入しやすいシンプルな漁具構造の網が出来た。
（選別網の入口を覆う網をなくしポケット状にした）
- グラントロープから1.8mの所に選別網口を設置すると良い傾向が見られた。（6月試験）
- カレイ類は獲れたものの、選別網口が安定的に開かず、大きさにも関係なくカレイ類が選別網から逃避しなかった。（8月試験）
- ハタハタ、エビ類、スルメイカはほぼ100%袋網で漁獲された。
- ズワイガニは平均2～3割（尾数ベース）選別網から逃避し資源にやさしいと同時に船上選別作業の手間を軽減できる。

【19年度の対応】

- 引き続き沖底船を用い、適切な選別網の取付位置等を検証する。
- 選別網口を安定的に開かせカレイ類が入るようにする。（選別網入口に浮きをつける等）
- 深海用デジカメで選別網入口を撮影チェックする。